

- 1 冬空の水湧くところより揺れぬ
- 2 使はざる傘を忘れず御講風
- 3 短日や振つて色づくポラロイド
- 4 寒雷や固く閉ぢたる蜜の蓋
- 5 如月の一夜を畳む日章旗
- 6 末黒野やつむじの二つある頭
- 7 洗車場を出でし機関車峰の雪
- 8 握りゐし拳ゆるめて卒業歌
- 9 陽炎や群れざる鳩に餌をやる
- 10 花冷や鉄琴の音指で消す
- 11 春寒や豆腐のしづむアルミ鍋
- 12 花月夜まぶたを閉づる音そろふ
- 13 音もなく真夜のレタスを一人剥く
- 14 ダービーの果てて伸びたる髭を剃る
- 15 梅雨冷えや青きほのほに海苔を焼く
- 16 飯茶碗よりふるがほの金魚かな
- 17 昼寢覚吐き出せし種乾きをり
- 18 六月のバターを溶かす指づかひ
- 19 滴りを受けて腕の傷冷やす
- 20 靴脱ぎて指広がらぬ花蘇鉄
- 21 短夜や灯を消す息の腥し
- 22 桜桃忌手紙の束の落つる音
- 23 夏月や角溶けのこる角氷
- 24 海猫や火木と開く診療所
- 25 担ぎ来しスカルを落とす水の音
- 26 妖怪の話をしつつ桃を喰ふ
- 27 炎日の鎖引きずる音続く
- 28 釘頭打ち残したる海の家
- 29 空瓶の干されて曇る夏深し
- 30 ゆく道を遮れば蟻足登る
- 31 夕立や指輪の沈む硝子鉢
- 32 茗荷の子手折るがごとき加減かな
- 33 西日灼くあしたのジョーの背表紙を
- 34 尻見せて猫夏闇に潜り込む
- 35 誰も見ぬテレビつけおく終戦日
- 36 展開図となりて伏せをり水中り
- 37 カルピスを少し濃くして秋隣
- 38 高潮に赤き鉄扉を閉ざしけり
- 39 目地白く磨きあげたり星の秋
- 40 苔の香の中庭に満つ白露かな
- 41 秋草や折り込みのなき新聞来
- 42 青柚子のしろく剥かれて転がらぬ
- 43 稲雀散るバンテージ解くごとく
- 44 メレンゲの中に冬日のくづれけり
- 45 もの言はず磨きて冬林檎の光る
- 46 しぐるるや脱臼癖のあるからだ
- 47 冬構へ去年の釘穴いくつかは
- 48 ひややかや裏向けて干す卸金
- 49 俎板のまだら乾きや小晦日
- 50 干し足らぬ大根ばかり残る稲架

- 75 74 73 72 71 70 69 68 67 66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51  
麦秋や教師を悼む歌つづく  
ならべ干す蒸籠いくつか竹の秋  
桜葉降るやあかるき喪の庭に  
表札は亡夫のままに紫木蓮  
初虹の真下献体供養塔  
春雨の中に仏師の気配かな  
自転車の主は去にけり昼蛙  
踏跟めけり卯波ばかりをみてをれば  
三月のいつも雪降る忌日かな  
瓦剥ぐ音の近くて桜餅  
靴底の減りて揃はぬ大試験  
渦巻きて早さを増すや雪解水  
春待つや手垢のつかぬ仏和辞書  
芥日の庭に莖立菜の茂る  
干肉を噛みて喋らぬ多喜二の忌  
短日やアイスピックの握り方  
塔頭や淡雪沈む手水鉢  
練炭の炬燵の昼の深きかな  
氷頭脛をとこ艶なる箸づかひ  
山々の埋めたる地平雪起し  
喪の服のはじめ弾きて冬の雨  
にはたずみゆつくり乾く三日かな  
初市の若狭ことばの競りあがる  
若潮や陽に照らされし荒磯道  
初星や汚れ少なき足袋を脱ぐ
- 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100  
花袋忌の陽の差し込まぬ理髪店  
とほまきに村を望みて栗の花  
山彦の届く街なり枇杷を剥く  
音立てず香水瓶を並べ替ふ  
若葉色満ちてトンネル終はりけり  
中陰の開け冷麦に芯のある  
廃校の草取をする男かな  
うすめてもうすめてもなほ檸檬水  
風死すや鉄鉢掴む手の巨き  
足音の絶えぬところに水を打つ  
堂狭く飛び回りたる蜻蜒かな  
蝮捕り覚えて村の嫁といふ  
ダム底の村より井守浮いて来し  
日の粒を握りて驟雨来りけり  
投擲の構へ夕立に打たれしまま  
終戦日のプールに葉撒く仕事  
早稲の香の来し方に星生まれけり  
麦の芽のそして霊歌は続くなり  
湯冷めして爪やはらかくすきとほる  
山茶花や畳廊下に日当たらぬ  
式日の大根畑のあかるさよ  
寒菊の吸ひ上げし水つぎ足せり  
鼻母音のゆたかに着雪注意報  
六花受けとむるため手を冷やす  
雪のことそれから豆の鍋のこと